

第5学年2組 特別の教科 道徳学習指導案

平成30年2月8日(木) 公開授業Ⅱ

平成30年2月9日(金) 公開授業Ⅲ

会場 3階-③ (Q 5年道徳)

授業者 新潟大学教育学部附属新潟小学校
教諭 剣 仁 美

1 主題名 よりよい生き方を求めて ー相互理解, 寛容ー 教材名 「すれちがい」(学研)

2 本主題の価値

本主題は、新学習指導要領解説第5学年及び第6学年の内容に準拠して設定したものである。

B 主として人とかかわりに関すること 【相互理解, 寛容】

(11) 自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、謙虚な心を持ち、広い心で自分と異なる意見や立場を尊重すること。

広がりや深まりのある人間関係を築くことを目的に、①自分の考えを相手に伝えたり相手の話を聞いたり、相手の事情を押し量ったりして相互理解を図ることと、②謙虚で広い心を持ち、異なる立場を尊重することの大切さについて理解を深めることを目指す内容項目である。

当学級の子どもの実態を見ると、自分の考えを伝えることは概ねできているが、「相手の立場や事情を押し量ったり相手の考えに耳を傾けたりして相手を理解すること」や「相手の言動が自分の期待と異なったときに広い心で受け止めること」の大切さの理解に弱さがある。本主題では、当学級の子どもの弱さに焦点付けた学習を展開し、相互理解と寛容の心を育む。本主題で扱う教材は、二つの場面で構成されている。

【飯田よし子の日記】

よし子は、えり子と一緒にピアノのけいこに行く約束をする。えり子は、一緒に行く時間をあとで電話するとよし子に告げる。家に帰ったよし子は、本を読んだり、二階でピアノの練習をしたりした。電話を待っているがなかなかこない。(早めに電話をくれてもいいのに…)よし子は、えり子に電話をしてみるが、えり子はお遣いに行っていないかった。(人を誘っておいて電話もせず、来もしない)よし子は、一人でピアノのけいこに行くことにした。そこへ、えり子がやってきた。しかし、よし子はえり子の言葉を聞き入れようとしない。

【中村えり子の日記】

えり子は、よし子をピアノのけいこに行く約束をする。時間は、私が決めてよし子に電話をすることにした。母とご飯を食べていると、久しぶりに親戚のおじさんが訪ねてきた。すると、母から買い物頼まれた。えり子は、よし子に電話をした。しかし、誰も出ない。えり子は、急いでスーパーに向かった。スーパーは、混んでいてレジには15人程並んでいる。やっとのことで家に帰ると、母から飯田さんから電話があったこと、二時にピアノのけいこに行くことを告げられた。(勝手に自分の都合で、二時なんて決めて)と腹が立った。ピアノの先生の家に着くと、よし子がいた。わたしは、すぐに謝ったが、よし子は話を聞こうとしない。(私の言い分を聞いてくれてもいいのに)もう、一緒にけいこに行くものかと思った。

本教材のような状況は、子どもの生活の中でもよく見られることであり、二者の立場が別々に記載されていることから、自分のこととして異なる立場から「相互理解, 寛容」について考えさせ、その大切さを理解させることにも有効な教材である。特に「飯田よし子の日記」には、当学級の子どもの同じように「相手の立場や事情を押し量ったり相手の考えに耳を傾けたりして相手を理解すること」と「相手の言動が自分の期待と異なったときに広い心で受け止めること」に弱さがある状況が記されている。このことから、本教材で学習を進めることには価値がある。

3 目指す姿

道徳的価値の大切さを理解し、これからの自分の生き方を考える子ども
具体的には、道徳的価値「相互理解, 寛容」の本質(相手の話を聞いたり、相手の事情を押し量ったりして理解しようとする、相手の言動が自分の期待と異なったときに広い心で受け止めること)や意義(「相互理解, 寛容」の大切さ)に着目し、多面的・多角的に考えたり、経験を基に考えたりするという「見方・考え方」を働かせ、よりよく生きるために根拠を明確にして判断し、行為として具現しようとする資質・能力を発揮して、「難しいとは思いますが相手の話を聞こうと思います。始めは、頭にくるから無視をしようと思っていたけれど、それでは解決にならないと思ったからです」と考える姿。

4 働かせる「見方・考え方」

道徳的価値「相互理解, 寛容」の本質や意義に着目し、多面的・多角的に考えたり経験を基に考えたりすること

5 育成する資質・能力

別紙、「指導計画」参照

6 指導の構想

本主題の指導構想で大切にしていることは以下のことである。

- ・当学級の子どもがもつ課題の要因となっていることに焦点付けた学習を展開するため、主として飯田よし子の立場で考えさせること

- ・「見方・考え方」を働かせて主体的に考えを深める対話活動(哲学対話)を取り入れること
- ・本主題での考えの変容を子ども自身が自覚できるようにすること
- ・大切だと考えたことを実現する具体的な行為まで追求させる問題解決的な展開にすること
- ・私が取り入れる「哲学対話」とは、次のような話し合いの手法である。
- 10人程で円座になり、問題解決や課題解決に向けて道徳的価値の本質や意義に着目した内容について話し合う。
- 「大切なこと」(裏面参照)を基に、自由を尊重しながら、考えを深めることを目指す。
- 「大切なこと」には道徳科で働かせたい「見方・考え方」を引き出す要素が含まれている。
- 「大切なこと」が機能しなかったり、対話が停滞したりしたときには、活性化させる指示を行うファシリテーターを一人置く。

働き掛け1【1日目】

教材を分割提示し、「自分だったらどうするか」と行為と理由を問う。

授業開始時の道徳的価値観を引き出すとともに、問いをもたせるための働き掛けである。

飯田よし子の日記の前半部分を読み聞かせ、「自分だったらどうするか。それは、なぜか」と問う。前半部分は、飯田よし子の日記の中のえり子がピアノ教室にやってきた部分までである。子どもは、よし子と似たような経験をもっているため、経験とつなげながら自分が取るであろう行為と理由を考える。ここでの考えが、授業開始時にもっている個々の道徳的価値観である。次に、飯田よし子の日記の後半部分を読み聞かせる。遅れてやって来たえり子に怒り、話を聞かずに知らん顔をしたよし子の気持ちや行為に共感する子どもが多いと考える。そこで、補助発問として、「よし子の気持ち、分かる？ どうして分かるのかな？」と問う。この働き掛けにより、子どもは問題場面を自分の経験としっかりつなげ、よし子の感じ方や考え方への共感を強めていく。このような子どもに、「中村えり子の日記」を読み聞かせる。子どもは、えり子にもえり子なりの理由があったことを知り、「よし子の立場では、どうすればよいのか」という問いをもつ。

働き掛け2【1日目】

二人の日記を知って、どのようなことを感じ、考えているかと、みんなで話し合いたいことを問う。

主体的に学習課題を設定させるための働き掛けである。

問いをもっている子どもに、二人の日記を知って感じたことや考えていることを問う。感じたことや考えていることを出し合わせ共有させ、問題の解決に最も大切な学習課題を見いださせるためである。子どもの発言を、授業者は「問題となった原因は何か」「どちらに問題があったか」「問題を防ぐにはどうしたらよいか」「問題になった後どうしたらよいか」等に分類する。また、それぞれの発言がどの立場なのか、内容がどう違っているのかが分かるように板書する。

次に、哲学対話の場を設定する。感じていること、考えていることを基に学習課題を設定させるためである。各グループで話し合った学習課題から学級全体で話し合いたい学習課題を設定させる。子どもは、各グループで話し合った内容の共通点に目を向けて学習課題をつくる。その中で、次時の哲学対話で最も深く話し合いたい内容はどれかを問う。子どもは、**道徳的価値「相互理解、寛容」の道徳的価値の本質や意義に着目し、多面的・多角的に考えたり、経験を基に考えたりする「見方・考え方」**を働かせ、「なぜ、こうなったのか。約束とは、何か」という学習課題を設定する。子ども自身に学習課題を設定させることで追究意欲も高まる。

働き掛け3【2日目】

哲学対話の場を設定し、自己内対話をする時間を設ける。

様々な情報を収集させるための働き掛けである。

学習課題を設定した子どもに、哲学対話の場を設定する。子どもは、学習課題に対しての考えを共有し、学習課題を多面的・多角的に考える**(道徳科①, 協働性)**。さらに、具体的にどのような行動することがよいのかについても話し合う**(道徳科③, 協働性)**。10分程の対話の後に、はっきりしたことやさらに考えたいことを振り返る場を設定する。対話で得た情報を整理させた後、対話を再開させる。この振り返りを挟んだ哲学対話により子どもはさらに考えを深めていく。

働き掛け4【2日目】

再度、「自分だったらどうするか」と行為と理由を問う。

哲学対話を通して得た様々な情報を基に根拠を明確にして判断させ、それを実現するための具体的な行為を考えさせるための働き掛けである。

哲学対話を通して、多様に考えた子どもに、再度「自分だったらどうするか」と問う。対話で得た様々な情報を基に最終的な判断をさるためである。子どもは、自分が取るであろう行為と理由を記述する。子どもは、授業開始時でもっていた考えと比較し「どのように変わったのか」「なぜ、変わったのか」と考え、行為と理由を記述する**(道徳科②)**。このようにして、**道徳的価値の大切さを理解し、これからの自分の生き方を考える子ども**になる。

働き掛け5【2日目】

学習で最も大切だと思うこと、その理由を問う。

様々な資質・能力を発揮したことを自覚させるための働き掛けである。

最終的な判断をした子どもに、2時間の学習で最も大切だと思うことと理由を問う。子どもは、自分が道徳的価値の大切さをどのように理解したのかを記述する**(道徳科①)**。また、これからの生活で生かしていきたいことや、自分にできる具体的な行為を記述する**(道徳科③)**。